

「人の体に入るもの、人から出るもの」

2014年09月06日

マルコによる福音書7章14節～23節。それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」聞く耳のある者は聞きなさい。イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた。イエスは言われた。「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分からないのか。それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物清められる。」更に、次のように言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

主イエスは、マタイ福音書5章18節～19節で「はっきりしておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる」と律法遵守を語っている。ところが、安息日論争では「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」、人のために律法があり、律法のために人があるのではないと語っている。上記の御言葉では、外から（口から）体に入るものは人を汚すことはない、人から出るものが人を汚すと言っておられる。これは、当時の人々には天地がひっくり返るような言葉であった。使徒言行録10章に、ペトロが幻を見たことが記されている。天から、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入った、布のようなものが吊降ろされ、「屠って食べなさい」という声を聞いた。ペトロは、慌てて「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません」と答えている。旧約聖書のレビ記11章には、動物、魚類、鳥類、昆虫、爬虫類に関して、清い物と汚れた物が区別され、汚れた物は食べてはならないと厳しく規定されている。イスラエルの民は「浄、不浄」の律法を厳格に守ってきた。

主イエスは、体に入るものは心の中に入るのではなく、腹の中に入り、不用のものは排泄され、人を汚すことはないと言われる。「すべての食物は清められる」と「浄、不浄」を分ける律法を取り払われた。人を汚すのは、心の中の悪い思いから出て来る「殺意、悪意、傲慢」などである。律法は人を苦しめ、萎縮させるのではなく、人を救い、自由にする「愛」であると明言された。この主張は律法・規則の大転換である。

マルチン・ルターは、司祭たちがラテン語の聖書を用い、神の言葉を独占していたのを、ドイツ語に翻訳し、民衆が読めるものとした。このことの歴史的意味は絶大である。彼は、当時の諸々の教会法を大胆に破っていった。それは「宣教」のためであった。

教会の規則は「愛」と「宣教」を広げていくように、絶えざる改革をすべきである。北村慈郎牧師は、オープン聖餐をしたことを教憲・教規違反であると「免職処分」を受けたが、主イエスの開かれた愛と多くの人への宣教を目指し、オープン聖餐を決断したのであろう。日本基督教団内で、真摯な議論がなされることを期待する。